C−3　接着糸による縫製　1　接着強度

文化女大家政　○森口君子　中屋典子　成瀬信子

目的　接着糸は、被服構成上、能率的な縫製を目的として、用いられるが、その接着糸によって縫製された縫製部分の性能について調べる。今回は、裾上げに用いた場合の接着強度について実験を行なった。

方法　接着糸は、300d，600d，900dの3種、試験布は、綿、羊毛、化繊などの12種の織物を用いた。家庭用ミシンで接着糸を下糸として、上糸には布地に適した糸を用い、直線1本縫い（9針/3cm），直線2本縫い（9針/3cm），ジグザグ縫い（13針/3cm）の3種の縫製を行なった。家庭用スチームアイロン（温度指標 綿，圧力、17.6g/cm²）で、セット時間、10，15，20，25，secで接着した。試幅、5.0cmとして引張試験器で接着部の強度を測定した。

結果　1、すべての試験布について、糸の太さ、縫い方、アイロンによる接着のセット時間のいずれの要因についても、接着部分の強度に差が見られる。2、縫い方については、2本縫いの場合が、いずれの試験布についても強度が大きい。3、300dと600dの差による強度差よりも、600dと900dの強度差は小さい。4、表面が平滑な布地は、比較的接着が強く、この場合は縫い方に一番大きく影響を受けている。5、比較的厚い綿、ウールの布は、糸の太さや縫い方よりも、セット時間に影響を受けている。6、半合成、合成繊維の布は、セット時間より、糸の太さ、縫い方の影響が大きい。